

# ブダペスト通信

盛田 常夫



2022年 NO. 36

10月10日

## テニスに興味になった大阪なおみと、孤高の高みを目指す大谷翔平

伊達公子の大阪なおみ批判が話題を呼んでいる。8月末の全米オープン1回戦で敗れた大阪選手は、試合後に自らの姿を映し出した場内の巨大スクリーンをスマートフォンで自撮りした。伊達はこの大阪の行動を、「選手としての自覚に欠ける」という趣旨の批判を行った。その通りだろう。ただ、大阪が第一線のテニス選手として活躍することを止めたと考えれば、この行動を理解できる。

すでにチーム大坂は崩壊状態にある。コーチのフィテッセがチームを離れただけでは、二人いた日本人のフィジカルコーチのうち、中村豊はシャポヴァロフのチームに移ってしまった。試合をしない大坂に帯同する意味がなくなったからだろう。現在は、父親がコーチの役割を果たし、もう一人の日本人トレーナーである茂木奈津子が身体ケアを担当しているが、事実上、チーム大坂の解体である。中村氏に代わってドイツ人トレーナーが入り、ヒッティングパートナーを帯同しているようだが、とても大きな大会を目指す陣容とは言い難い。

2022年は3-4月のマイアミオープンで準優勝するまではそれなりの試合数をこなしていたが、クレイコート・シーズンに入ってからほとんど大会で1回戦負けしている。数えるほどしか試合をしていない。9月の東レパンパシフィックオープンでも、1回戦は1ゲームを終えたところで相手が棄権し、2回戦は腰痛のため棄権したので、日本での試合時間5分程度である。すぐに次のトーナメント出場のために移動するのかもしれない。日本に居残り、日本開催のNBAの試合観戦をしていることが分かった。他の選手が生活を賭けてトーナメントを転戦しているが、大坂はもうそのようなトーナメント生活に関心がないようだ。引退表明は近い。

若くしてテニス選手として頂点を極めてしまったので、テニスに対する情熱が薄れたのだろう。その点で、全豪オープンで優勝した後、引退を表明したパーティは明快だ。大阪も中途半端に試合に出るのではなく、引退表明して次の人生の目標に向かって進んだらどうか。いつまでも片手間にトーナメントに出ても意味がない。きっぱりとテニス界から引退し、新しい人生を歩むべきだ。

それにしても、大谷翔平の活躍は見事だ。規定投球回数と規定打席数の両方をクリアした選手として、再び大リーグの歴史を塗り替えた。62本の本塁打を放ったヤンkeesのジャッジ選手とのリーグ MVP 争いが話題になっているが、冷静になって考えれば、大谷選手の記録は大リーグ史上初の快挙だから、ジャッジ選手の記録がア・リーグの本塁打記録を61年ぶりに書き換えたとしても、大谷選手とは比較にならない。ただ、大谷選手が二刀流を続けていると、新しい記録が生まれるばかりで、ほかの選手が MVP を獲る余地がなくなる。だから、大谷選手を評価するには、別の賞を設定するしかないという議論も湧き上がっている。

昨年まで、DH 制で投手として登場した選手は、降板した後に、DH として打席に立っていないという規則があった。ところが、大谷選手の活躍で、投手降板後も DH として試合に出場できるという「大谷ルール」ができた。本格的な二刀流をやっている選手は大谷しかいないが、大谷選手だけのために作られた特別ルールだから、「大谷ルール」と呼ばれる。一人の選手の活躍が、大リーグ規則を変えさせたのである。同じように、二刀流を表彰するための「大谷賞」を新設でもしない限り、ここ数年は大谷以外に MVP を獲れる選手がいなくなる。このように、一人の日本人選手が 100 年の歴史を誇る大リーグの歴史を書き換えている。

大谷選手の凄いところはその身体能力である。一刀流でも常に故障のリスクはあるが、二刀流になれば故障のリスクは段違いに高くなる。投手として肘や肩の故障は常に付きまとうが、大谷選手のように一塁ゴロでも内野安打にできるほどの走力があり、果敢に盗塁を狙う選手には肉離れや野手との接触によるケガのリスクが高い。野球の場合、サッカーと違い、常に体を動かしているわけではない。打者はボールを打った瞬間に全力疾走するが、急激な加速は太ももの筋肉系の故障を起こしやすい。しかし、大谷選手はそのようなリスクにかまうことなく全力疾走する。これだけ走って、筋肉系の故障がないのは奇跡に近い。

自分の動きで故障するだけではない。デッドボールによる故障のリスクもある。投手として登場する最終戦であと 1 回を投げ切れれば規定投球回数に到達できるところまでできたが、その登板前日の試合で、大谷選手は利き腕の右肘上にデッドボールを受けた。場内には悲鳴が上がった。歴史的な記録の達成を阻むかのようなデッドボールである。肘当てを着用していても、当たりどころが悪ければ、最終登板が不可能になる。あと 1 回を投げ切れれば記録達成できるところで、翌日の登板が不可能になるかもしれないアクシデントに見舞われた。しかし、幸いにも大事を免れ、翌日の登板で規定投球回数を無事クリアし、大リーグの歴史に新たな記録を付け加えた。なんとも驚くべき体の強さだ。

大谷選手が好かれるのは、大リーグの若手移籍選手の年俸抑制規則でここまで信じられないような低年俸に据え置かれていたにもかかわらず、お金に執着することなく、選手としての高みを追求している姿勢である。1 年だけ活躍する選手は多くいるが、複数年にわたって、高レベルの打者あるいは投手として活躍できる選手は少ない。そのなかでも、二刀流で 2 年連続して活躍したことが高く評価されている。もはや MVP を獲る

かどうかは大谷にとって、大きな問題ではない。大谷はこれで満足することはない。可能な限り、高みを目指すだろう。昨シーズンも、体を休めつつ、さらに強靱な体を作るトレーニングを怠らなかった。日本の TV の娯楽番組への出演を断り、精進を重ねる姿は求道者に近い。

人は何を指すかによって、生き方が変わる。大坂なおみは自分が何をしたいかを自問しているのだろう。それが決まるまで、中途半端なテニス選手でいることになる。自分の人生だから、無理にテニス選手でいる必要はない。早く新しい目標を見つけて、新たな人生を歩んでほしい。